

## 女子大学生の自立と将来適応感に母親及び父親との 心理的距離が与える効果

堂 野 恵 子

The Effects of the Psychological Distances of Both Daughter-mother and Daughter-father Relationships in Female Students on the Development of Their Autonomy in Present Life and Subjective Adjustment for Near-future Life

Keiko DOHNO

### 要 旨

本研究の目的は、個性化と社会化の統合期に入る女子大学生の自立と将来への適応感に、母親及び父親との親子関係、特に心理的距離が与える効果を「統合的モデル」論に立って検討することであった。このモデルからは、分離と結合のバランスよい展開、つまり心理的距離が遠すぎも近すぎもせず「中程度」にあることが、最も効果性が高いと予測される。結果は、自立と将来適応感のいずれについても、心理的距離が中程度ではなくむしろ「近い」場合に有意に高い効果性が見出され、統合的モデル論よりも、「結合モデル」論に与するものとなった。また父母間で結果に差異がみられなかったことから、従来検討されることが少なかった父についても、娘との親密化の進む現在、母と同様な結合的距離の効果性の存在が明らかとなった。イメージ画の分析からも、少数の事例的報告ではあるが、母親及び父親への心理的距離が女子大学生の自立及び将来適応感に与える効果が示唆された。

キーワード：母・父との心理的距離、統合的モデル、自立、将来適応感、イメージ画分析

### 問 題 と 目 的

成人への移行期にあつて、個性化と社会化（堂野，2009）の統合期に入る「青年期後期」の女子大学生にとっては、「自己意識」の発達はとりわけ重要な意味を持つ（堂野，2014）。つまり、「今ある自分」、現在の自己の姿を確認・受容して「自己決定的・自立的」に行動できること、またそこから数年の内に社会に独り立ちしていく存在として自己を把握し、「将来の自己」の姿を適切・肯定的にイメージし（「将来適応感」）、無用な不安・動揺なく実現への一歩をふみだすことは、この時期の適応の基本であり、重要な発達課題となる。

青年の個性化の側面としての「自立」の発達については、一般的に「情緒的自立」、「行動的自立」、「価値知的自立」の3側面が指摘される（平石，2014）。中でも従来から、親を含む周囲の重要な他者である大人との親密な依存的関係からの自立、つまり「情緒的自立」に関心が集まってきた。またこれを進める要因の1つとして、社会化の側面では「親子関係」、特に「心理的距

離」のあり方が問題となってきた。

その当初は、平石（2014）も指摘するように、「親からの分離」側面、つまり親に対して明確な距離がとれるようになることの重要性を指摘する研究が多かった。例えばSteinberg & Silverberg（1986）は、親からの情緒的自立を分離の下位尺度から測定する尺度を作成し、青年前期には年齢とともに情緒的自立が高まる傾向や、心理的健康面で安定する傾向を見出した。さらに、この情緒的自立の背景要因として、親の生活満足度が関連することも見出した。

ところで本研究で問題にする青年後期の女子の親子関係には娘－母関係と娘－父関係があるが、従来は娘－母間の強い結びつきが注目され、本邦の研究では娘－母関係の方が娘－父関係よりも関心を集めてきた。またその当初は、海外と同様に、母親からの分離を問題にし、その低さが青年後期にある娘の自立の遅れや不適応の背景にあるとする研究が多く展開した。例えば臨床的研究として、共依存にみられるように、分離ができず娘－母間の距離が過剰に近いことが不適応の背景にあるとする指摘（例えば、渡邊，1997）や、昨今の通常の娘－母関係における友達親子化現象や一卵性双生児化現象に着目して、こうした距離の減少が親密な関係性の陰で母からの被支配感や息苦しさ感を引きだし、娘の不適応を招きやすいといった指摘もされている（例えば、信田，2008）。

しかし一方、研究の中には逆に、大学生の情緒的自立は抑うつ（Beyers & Goossens, 1999）や不安（Papini & Roggman, 1992）などの心理的不適応の側面と関連することを見出したものもあった。こうした研究間の不一致をふまえて現在は、情緒的自立の発達要因としては種々の文脈（例えば、本人の性、年齢、親の養育態度・親子関係、家庭環境など）を考慮する必要がある、親からの「心理的分離」は重要な条件ではあるが必要条件ではないとの見方が主流になってきている（平石，2014）。

上述のように第1のモデルが「親からの分離」（心理的距離：遠い）側面の重要性を主張するのに対し、第2のモデルは「親との結合」（心理的距離：近い）側面の重要性を主張するものである。つまり親に対する距離の近さを、乳幼児期の情緒や社会性に関する重要な発達課題であってその後の人格発達においても内的作業モデルとして重要な機能を果たす（Bowlby, 1969, 1973）とされ、現在では青年期以降もその存在が認められている（Allen, 2008）親への「愛着」や「親密さ」といった心的機能からとらえ、これを青年後期の情緒的自立の発達要因として重視するのである。こうした研究には海外では、分離が強く母親との距離が遠い場合には娘の自立や適応が低下するという報告（例えば、Beyers, et al. 1999）などがある。

本邦では、水本ら（2010）が「親との結合」側面の重要性を検討する研究を行っている。ここでは、昨今の青年期の娘の母との極めて近い心理的距離のネガティブ性に関する分離論の指摘も認めつつ、むしろこれをポジティブに捉え、母との強い結びつきの下で娘は距離の近さを保ちながら精神的自立を高め、また現実適応もよいのではないかとして検討している。女子大学生を対象に、日常生活における娘－母間の距離を「母子密着尺度」（藤田，2003）で、また精神的自立を精神的自立尺度（福島，1992）で測定し、各々の因子プロフィールにより4類型（密着型、依存型、母子関係疎型、自立型）を抽出し、この4類型と抑うつ度からみた娘の現実適応との関係が分析された。その結果、母との距離が遠い場合には娘の自立や適応は抑制されること、一方母との距離が近い場合には、その近さが娘の自己統制感を育くみやすいものであれば娘の自立や適応は促進される、一方育くみにくいものであれば抑制されることが見出された。

第1のモデルである「分離論」と第2のモデルである「結合論」との論争が展開されている中

で、またそれぞれの論の中でも研究結果の不一致が見られる中で、1980年代以降、第3のモデルとして、従来対立し相容れない局面として扱われていた分離と結合の両側面を積極的に結び付け、その適切な相互作用的展開の重要性を主張する、包括的な「統合論」が出現してきている。平石（2014）が指摘するように、その代表であるGrotevant & Cooper（1985, 1998）は、青年と親との関係は、日常のコミュニケーションの中で展開する自己主張（自分の意見を明確に伝える責任）と分離（自分と他者の意見の相違を明確に表明）を主軸とする「独自性」（従来の分離モデルにあたる）と、浸透性（他者の意見に対する応答性）と相互性（他者の意見に対する感受性と敬意）を主軸とする「結合性」（従来の結合モデルにあたる）の2つの次元から捉えられると考えている。またAllen & Hauser（1996）は、この2つの次元は親との関係性の中で同時に生起し、青年の心理社会的発達に大きな意味をもち、両者の均衡ある発達は青年期以降の適応に重要な役割を果たすと考えている。

本邦においてもこの統合的モデル論に基づいたいくつかの研究が行われているが（例えば、平石, 2007; 久保田, 2009; 高橋, 2008, 2009）、本研究の第1の目的は、この観点に立って、娘-母間、及び娘-父間の心理的距離が青年期後期の女子大学生の自立と将来への適応感に与える効果を検討することである。このモデルに従えば、女子大学生の自立と将来への適応感には、親との関係において「分離」と「結合」がともにバランスよく展開すること、つまり心理的距離が遠すぎも近すぎもせず「中程度」にあることが最も効果的であろうと予測されよう。この検証を試みた。

研究の方法としては、水本ら（2010）を参考に、女子大学生の認知する「娘-母間の距離」については母子密着尺度（藤田, 2003）から捉える。しかし娘の自立については、彼らの「精神的自立」に替えてより「広範な自立」を取り上げることにした。これは、先に述べた個性化と社会化（堂野, 2009）の統合期に入る女子大学生の重要な発達課題としての「自立」（堂野, 2014）の観点からは、現在の情緒的自立や精神的自立だけでなく、そこから派生する自己決定・自立的行動も含むより広範な自立を取り上げたほうがよいと考えるからである。実際には、青年の自立を「将来展望」「独自性」「自立の認識」「対人協調」「感情統制」「影響受けやすさ」の6因子から測定する菱田・加藤・金子（2009）を用いる。また水本ら（2010）では、「娘-母間の距離」と娘の「精神的自立」との各因子プロフィールの組み合わせから抽出された娘-母関係の4類型と、娘の現実適応との関係が分析された。つまり、「娘の自立」は従属変数ではなく、独立変数である親子関係を構成する要素の一つにすぎない。しかし本研究では、女子大学生の重要な発達課題としての自立を問題にすることから、自立を「従属変数」として、独立変数としての青年期の娘-母間の心理的距離が自立に与える効果について検討を行う。さらに水本ら（2010）では、従属変数としての「現実適応」については、娘の「抑うつ度」から分析されていた。それももちろん重要である。しかしこれについても、個性化と社会化の統合期に入る女子大学生としての重要な発達課題との観点に立つならば、数年の内に社会に独り立ちしていく存在として自己を把握し、「将来の自己」の姿を適切・肯定的にイメージできること、つまり「将来適応感」をどのように持てるかは、より重要な現実適応の姿であると考ええる。従って、本研究では、「娘の自立」と並んで「将来適応感」も従属変数として取り上げ、娘-母間の心理的距離が与える効果について検討を行う。実際には、青年の適応感を「居心地の良さの感覚」「課題・目的的存在」「被信頼・受容感」「劣等感の無さ」の4因子から測定する青年用適応感尺度（大久保, 2005）を用い、大学卒業後の近い将来の自分についての評定を求める。

また先にも述べたように本邦では、従来青年後期の娘の父との結びつきは弱いとされ、娘－父関係が娘の自立や適応へ与える影響性についてはそれほど注目されてこなかった。しかし父についても娘との間の親密性の増大と友達親子化現象が指摘される昨今、「娘－父間の心理的距離」が娘の自立と将来適応感に与える効果に関しては、母についてと同様な予測も可能であろう。この検証を本研究の第2の目的とする。なお娘－父間の心理的距離の測定には、娘－母間の距離について用いた母子密着尺度（藤田，2003）の各質問項目を、「父親」に置き換えて用いる。

ただ、こうした質問紙による人格査定の限界としては一般的に、社会的望ましさからくる自我防衛の虚偽性やステレオタイプの反応の出現、表面的な査定に終始しがちな傾向などが指摘されている。これを少しでも補足するとともに質的検討も志向する観点から、「娘－母間」、及び「娘－父間」の心理的距離については、質問紙による査定に加え、水本ら（2010）では行われていない被験者の描く母、及び父との日頃についての「イメージ画」（やまだ，1988）の分析も取り入れ検討する。これを本研究の第3の目的とする。イメージ画は、言語ではなく絵画表現を用いる投影法的手法であり、利点としては、理性よりも当人の深い感性に基づくより内面的な本質が率直に表出されやすいこと、また情報処理・伝達の方法として優れており、査定者はパターンとして瞬時的・直観的にその全体像を把握できやすいこと、などが指摘されている。

## 方 法

1. 調査対象：女子大学生74名。

2. 調査時期：2012年6月

3. 調査方法・調査内容：

無記名式調査法により、下記の（1）～（4）の内容について調査を行った。

（1）女子大学生の娘－母間、及び娘－父間の心理的距離

日常生活における娘－母間の心理的距離を査定するために、「母子密着尺度」（藤田，2003）32項目（下位尺度：「コミュニケーション」「被サポート」「母親への配慮」「共行動」「被世話」）について、大学生用としては不向きな2項目を削除した30項目を用い、「全然そうは思わない」から「大変そう思う」までの6件法で評定を求めた。娘－父間の心理的距離についても、質問項目の「母親」を「父親」に変更したものをを用い、同様に6件法で評定を求めた。

（2）女子大学生の自立

青年の自立を広範囲に査定する菱田ら（2009）の自立性尺度27項目を用い、現在の自分について、「全く当てはまらない」から「非常に当てはまる」までの5件法で評定を求めた。

（3）女子大学生の将来適応感

大久保（2005）の青年用適応感尺度の30項目について、自分の近い将来への適応感を測るものとしては不向きな1項目を削除した29項目を用い、「卒業後、近い将来の自分」は以下の質問にどのくらい当てはまると思うか」と教示して、「全く当てはまらない」から「非常によく当てはまる」までの4件法で評定を求めた。

（4）女子大学生の娘－母間、及び娘－父間の心理的距離に関するイメージ画

「あなたとあなたの母親、あなたとあなたの父親との現在の状況を表す“人の絵”を描いてください」と教示して、調査用紙の2つの四角い枠内（各17.5cm×9.5cm）に各々描かせた。



## 結 果 と 考 察

### 1. 女子大学生の娘－母間及び娘－父間の心理的距離，自立，将来適応感の全体傾向

#### (1) 女子大学生の娘－母間，及び娘－父間の心理的距離の全体傾向と群設定

母親，及び父親に対する心理的距離に関する質問項目への回答結果に基づき，母親，及び父親との心理的距離を大（遠い）と思うほど得点が大となるように得点化（1点から6点）し，母親・父親別に全体平均を算出した。娘－母間の距離については平均が2.7点（SD：0.40）であり，理論的平均が3.5点となることから，本研究の女子大学生は母を心理的にやや近く感じているといえる。一方，娘－父間の距離については平均が4.0点（SD：0.41）であり，女子大学生は父を心理的にやや遠く感じているといえる。また女子大学生は，母親よりも父に対して心理的距離を有意に大きく感じていた（ $t(146) = 19.40, p < .001$ ）。娘－母間，娘－父間別に，各々平均 $\pm 0.5SD$ を基準に，心理的距離H（遠）群（各29名），M（中度）群（各17名），L（近）群（各28名）を抽出した。

#### (2) 女子大学生の自立及び将来適応感の全体傾向

自立に関する質問項目への回答結果に基づき，自立しているほど得点が大となるように得点化（1点から5点）した（自立得点）。全体の平均は3.33（SD：0.25）で理論的な平均3.0とほぼ等しいことから，本研究の女子大学生の自立は普通程度であるといえる。

近い将来への適応感に関する質問項目への回答結果に基づき，適応できていると予期するほど得点が大となるように得点化（1点から4点）した（将来適応感得点）。女子大学生全体の平均は2.76（SD：0.24）で理論的な平均2.5とほぼ等しいことから，本研究の女子大学生の将来への適応感は普通程度であるといえる。

### 2. 女子大学生の娘－母間及び娘－父間の心理的距離と，自立及び将来適応感との関連

女子大学生の現在の自立について，親との心理的距離（L（近），M（中度），H（遠））及び親の違い（母親，父親）が与える効果を検討するために，両者を組み合わせた6条件別に女子大学生の自立得点の平均を算出した。これをFigure 1に示す。なおSDは，母親への心理的距離L群，M群，H群の順に0.45，0.41，0.39であり，父親への心理的距離についても同様に，0.33，0.50，0.42であった。Figure 1の自立得点について，親との心理的距離（L，M，H） $\times$ 親（母親，父親）の2要因分散分析を行った。その結果，心理的距離の主効果のみ有意（ $F(2,71) = 3.63, p < .05$ ）であり，多重比較の結果，L群はH群に比べて自立が有意に高いことが示された。

女子大学生の近い将来への適応感について，親との心理的距離（L（近），M（中度），H（遠））及び親の違い（母親，父親）が与える効果を検討するために，両者を組み合わせた6条件別に女子大学生の将来適応感得点の平均を算出した。これをFigure 2に示す。なおSDは，母親への心理的距離L群，M群，H群の順に0.49，0.48，0.46であり，父親への心理的距離についても同様に，0.43，0.340，0.49であった。Figure 2の将来適応感得点について，親との心理的距離（L，M，H） $\times$ 親（母親，父親）の2要因分散分析を行った。その結果，心理的距離の主効果のみ有意（ $F(2,71) = 4.63, p < .05$ ）であり，多重比較の結果，L群はH群に比べて近い将来への適応感が有意に高いことが示された。

以上，女子大学生は，母親，父親の違いなく，親との距離が近い場合は遠い場合に比べて，有

意に高い自立、及び近い将来への適応感を示した。当初、統合的モデル論（例えば、Allen, et al. 1996 ; Grotevant, et al. 1985, 1998 ; 平石, 2007 ; 久保田, 2009 ; 高橋, 2008, 2009）に従って、女子大学生の自立及び近い将来への適応感には、親との関係において「分離」と「結合」がともにバランスよく展開すること、つまり心理的距離が遠すぎも近すぎもせず「中程度」にあることが最も効果的であろう、従って自立のグラフはM字型になるだろうと予測した。この検証が本研究の第1の目的であったが、これを確かめることはできなかった。つまり、父母ともに、心理的距離が「中程度」の場合に最も高い効果性が見出されたのではなく、むしろ「近い」場合には、遠い場合に比べて有意に高い自立や近い将来への適応感が見出された。この結果は、青年後期の重要な発達課題である「自己意識」の発達（堂野, 2014）の一側面としての自立を進める要因に関して、心理的距離の効果に関するモデル論としては、「統合論」よりも「結合論」（例えば、Beyers, et al. 1999 ; Bowlby, 1969, 1973 ; 水本ら, 2010）に与するものであった。

また上記の結果は、母親、父親の違いなく見出された。このことは、本研究の第2の目的、つまり「父についても娘との間の親密性が増大し友達親子化現象が指摘される昨今、娘－父間の心理的距離が娘の自立と将来適応感に与える効果に関しては、母についてと同様な予測も可能であろう」との考えに関して、確かめることができたといえよう。

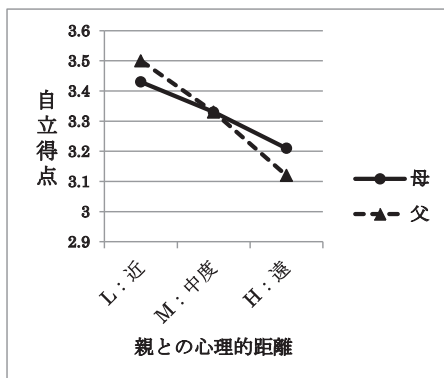


Figure 1  
親との心理的距離と女子大学生の自立

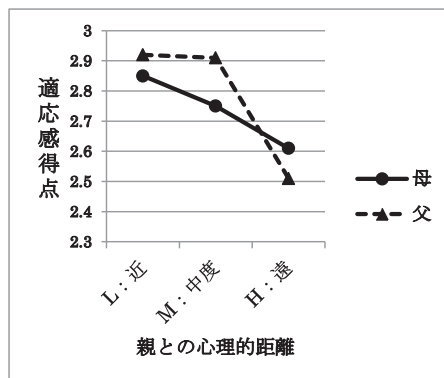


Figure 2  
親との心理的距離と女子大学生の将来適応感

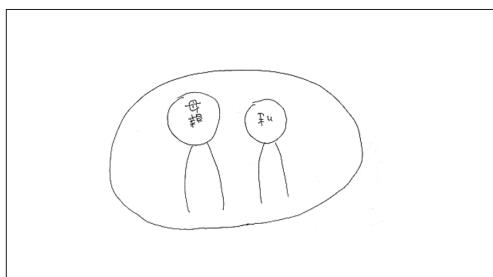
### 3. 女子大学生の娘－母間及び娘－父間の心理的距離と、自立及び将来適応感との関連 (イメージ画の分析)

結果2では、親との心理的距離が女子大学生の自立及び将来適応感に与える効果について、母親と父親で差異がないかを検討するために、親別に分析してきた。しかし娘は、その両方が合わさった全体としての親子関係の影響を受けていることは十分考えられる。そこで、質問紙の心理的距離の資料に基づき、各被験者について、母親及び父親それぞれとの心理的距離の組み合わせにより全体としての親子関係パターンを決定してみた。その中、典型的な5パターン、つまり母親及び父親ともに距離の近いL-L群、ともに中程度のM-M群、ともに遠いH-H群、母親とは近く父親とは遠いL-H群、母親とは遠く父親とは近いH-L群について取り上げ、被調査者の描いた自分と母親、及び自分と父親との現在の状況を表すイメージ画について分析した。また併せて、同じく質問紙の資料を基に、その個人の自立及び将来の適応感との関連もまとめてみた。なおここでは紙幅の関係もあり、その中の典型的事例について報告する。

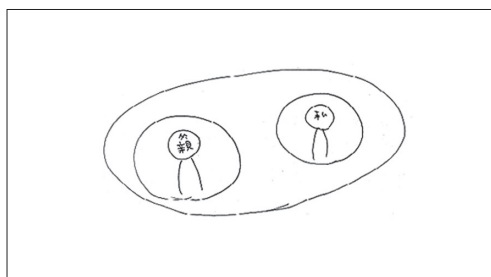
## (1) L-L群 (距離感: 母親;近い—父親;近い) の1例

(Figure 3-1)

女子大学生A (自立: 高, 将来適応感: 高)



(自分と母)



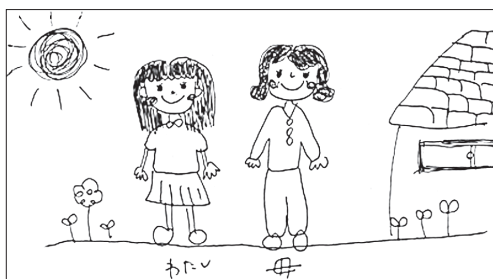
(自分と父)

自分と親を1つの円の中に描いている。母親とは同じ空間にいるが、父親とは同じ空間にいないながらも別の円で囲み、独立しているようにもみえる。親との距離が近く親密でありながらも、きちんと自我を持つと考えられる。自立や将来適応感はともによい。

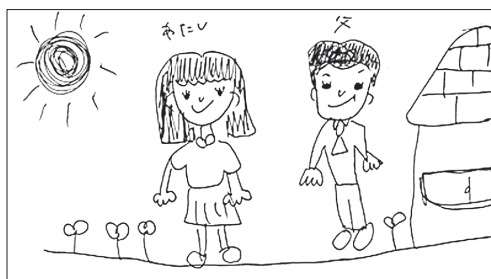
## (2) M-M群 (距離感: 母親;中程度—父親;中程度) の1例

(Figure 3-2)

女子大学生G (自立: 中度, 将来適応感: 中度)



(自分と母)



(自分と父)

晴れた日に親子で外にいる絵であるが、母親とも父親とも近すぎず遠すぎずの距離であり、表情もにこやかである。統合的モデル論からは、自立や将来適応感が高いと予測されるが、結果はいずれも中度となっていた。

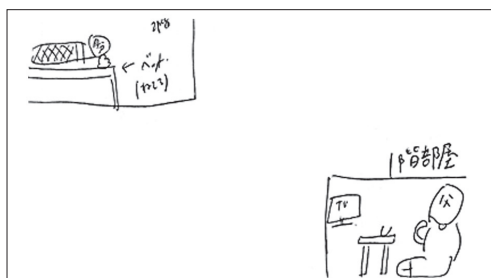
## (3) H-H群 (距離感: 母親;遠い—父親;遠い) の1例

(Figure 3-3)

女子大学生L (自立: 中度, 将来適応感: やや低)



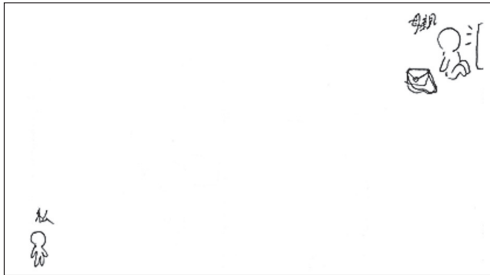
(自分と母)



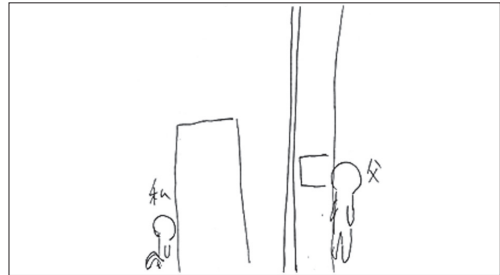
(自分と父)

家の中で近くにいなながらも娘と母が、また娘と父が、各々自分の時間を過ごし関わっていない状態を描いており、親子間の心理的距離の存在をうかがわせる。自立は中度であったが、将来への適応感はやや低となっていた。

- (4) H-L群（距離感：母親：遠い—父親：近い）の1例 (Figure 3-4)  
女子大学生J（自立：中度，将来適応感：やや低）



(自分と母)



(自分と父)

母親と自分を対角線上に描き、心理的距離の存在をかなり明白にうかがわせる。それに比べると父親との距離は近いが、間には大きな厚い壁のようなものが描かれており、心理的距離も感じさせる。ある意味H-H群に近いともいえ、Jの「自立は中度であるが、将来への適応感はやや低」という状態を考える上でのヒントにもなる。

以上、内面的な本質が率直に表出されやすく質的分析も志向できるとされるイメージ画（やまだ，1988）の分析からも、少数の典型的事例の報告ではあるが、女子大学生の親への心理的距離が自立及び将来適応感に与える効果が示唆された。しかしこの方法が質的分析としてさらに信頼性を持つためには、特徴的な事例については後から本人に面接調査し、自立や将来適応についての詳細な聞き取り報告を得ることも必要と思われる。これは、本研究では無記名式調査法を用いたため実施できなかったことであり、今後の研究計画上は、記名式調査法の実施や当初から面接調査への協力依頼をしておくなど、調査方法の工夫が検討課題となる。

#### (付記)

本論文は、筆者の指導による平成24年度安田女子大学文学部心理学科卒業研究（中野，2013）の調査資料の一部を用いて、女子大学生の自立と将来適応感に与える親子関係、特に心理的距離の効果について、生涯発達における「個性化と社会化」（堂野，2009，2014）の視点、及び「分離論」、「結合論」、「統括論」の視点に基づく問題・目的の大幅な拡充により、新たに執筆したものである。資料の利用に快く応じてくれた中野あずさんに御礼申します。

#### 引用文献

- Allen, J.P. (2008). The attachment system in adolescence. In J. Cassidy & P.R. Shaver (Eds.), *Handbook of attachment theory and research* (2nd ed., pp.419-435). New York: Guilford Press.  
Allen, J.P., & Hauser, S.T. (1996). Autonomy and relatedness in adolescent-family interactions as



- predictors of young adults' states of mind regarding attachment. *Development and Psychopathology*, 8, 793-809.
- Beyers, W., & Goossens, L. (1999). Emotional autonomy, psychosocial adjustment and parenting : Interactions, moderating and mediating effects. *Journal of Adolescence*, 22, 753-769.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss : vol.1. Attachment*. London : Hogarth Press.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss : vol.2. Separation : Anxiety and anger*. London : Hogarth Press.
- 堂野恵子 (2009). 知的発達と思考・記憶 堂野佐俊・堂野恵子 発達理解の心理学 pp.93-123 おうふう.
- 堂野恵子 (2014). 絵本読み体験が女子大学生の自己肯定感の変化に及ぼす効果 (1) - 自己肯定感尺度からの分析 - 安田女子大学大学院文学研究科紀要, 19, 21-36.
- 藤田達雄 (2003). 思秋期前の妻の孤独感と母子密着に関する研究 名古屋短期大学研究紀要, 41, 75-87.
- 福島朋子 (1992). 思春期から成人にわたる心理的自立 : 自立尺度の作成及び発達の検討 発達研究, 8, 67-87.
- Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (1985). Patterns of interaction in family relationships and the development of identity exploration in adolescence. *Child Development*, 56, 415-428.
- Grotevant, H.D., & Cooper, C.R. (1998). Individuality and connectedness in adolescent development : Review and prospects for research on identity, relationships, and context. In E. Skoe & A. von der Lippe (Eds.), *Personality development in adolescence : A cross national and life span perspective*, pp.3-37. London : Routledge & Kagan Paul.
- 平石賢二 (2007). 青年期の親子間コミュニケーション ナカニシヤ出版.
- 平石賢二 (2014). 親子関係 後藤宗理・二宮克美・高木秀明・大野 久・白井利明・平石賢二・佐藤有耕・若松養亮 (編) 新・青年心理学ハンドブック pp.304-314 福村出版.
- 菱田陽子・加藤礼子・金子劭榮 (2009). 現代青年の自立性に関する研究 - 自立性尺度作成の試み - 北陸学院大学・北陸学院短期大学部研究紀要, 2, 157-168.
- 久保田桂子 (2009). 青年期の母娘関係の発達差 : 会話分析による青年期前期と後期の交流の比較 心理学研究, 79, 530-535.
- 水本深喜・山根律子 (2010). 青年期から成人期への移行期の女性における母親との距離の意味 : 精神的自立・精神的適応との関連性から 発達心理学研究, 21, 254-265.
- 中野あずさ (2013). 女子大学生の自立と適応に母親及び父親との距離感が与える効果 - 質問紙調査 + イメージ画からの検討 - 平成24年度安田女子大学文学部心理学科卒業論文.
- 大久保智生 (2005). 青年の学校への適応感とその規定要因 - 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 - 教育心理学研究, 53, 307-319.
- Pepini, D.R., & Roggman, L.A. (1992). Adolescent perceived attachment to parents in relation to competence, depression, and anxiety : A longitudinal study. *Journal of Early Adolescence*, 12, 420-440.
- 信田さよ子 (2008). 母が重くてたまらない : 墓守娘の嘆き 東京 : 春秋社.
- Steinberg, L., & Silverberg, S.B. (1986). The vicissitudes of autonomy in early adolescence. *Child Development*, 57, 841-851.
- 高橋 彩 (2008). 男子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 16, 159-170.
- 高橋 彩 (2009). 女子青年における進路選択時の親子間コミュニケーションとアイデンティティとの関連 パーソナリティ研究, 17, 208-219.
- 渡邊恵子 (1997). 青年期から成人期にわたる父母との心理的關係 母子研究, 18, 23-31.
- やまだようこ (1988). 私をつつむ母なるもの - イメージ画にみる日本文化の心理 有斐閣.